

将棋棋士

谷川 浩司さん

史上最年少の「名人」から35年。今、思うこと

天才集団と言われる将棋界で、「名人」の座につける棋士は、ごくわずかである。そんな中、史上2人目の中学生棋士となり、史上最年少の21歳で名人の座についたのが谷川浩司九段である。頭脳スポーツである将棋の世界で、40年以上も第一線のプロ棋士として活躍し続けられている秘訣は何か、話をうかがった。

【たがわ・こうじ】1962年、兵庫県神戸市出身。5歳で将棋を始め、11歳で日本将棋連盟の奨励会に入会。14歳8ヵ月で四段に昇段し、史上2人目の中学生棋士としてプロデビューした。21歳の時には、名人戦で当時の加藤一二三名人を破り、史上最年少の「名人」となる。29歳で史上4人目の四冠王（竜王・棋聖・王位・王将）となるなど、将棋界の第一人者として活躍。35歳の時、通算5期で「名人」を獲得し、十七世名人に。2009年～2011年に日本将棋連盟棋士会初代会長、2012年～2017年に日本将棋連盟会長も務めた。2014年、紫綬褒章受章。

——谷川浩司九段は5歳で将棋を始められたそうですね。お兄さんと兄弟喧嘩が絶えないので、それを何とかしようと思ったお父さんが将棋セットを買ってこられたことがきっかけだったとか。将棋には最初から夢になられたのですか。

そうですね。父としては兄弟が仲良く遊べるようにということ、たまたま思い浮かんだのが将棋だったようです。昭和42年当時、遊びの種類も少なかったですし、勝ち負けがはつきりつくのが刺激的で、熱中しました。兄は5歳上で私のほうが弱かったです、それでも3〜4回に1回くらいは勝てるのが嬉しかったですね。

——お兄さんに勝ちたくて指されていたと。両親の話によると、私は小学校に入る前からひとり将棋を指していたようです。そんな私のために、父は将棋の本を買ってきたり、将棋大会に連れて行ったり、将棋をするための環境を整えてくれました。小学2年生になってからは、毎週土曜日曜と、将棋教室への送り迎えもしてくれました。

——その後、小学5年生の時に、プロ棋士になるための養成機関、日本将棋連盟の新進棋士奨励会（以後「奨励会」という）に入られたんですね。

当時はまだ、将棋を指す子どもが少なかったんです。私は地元神戸で将棋が強い子どもとして注目されていましたが、東京にはまだまだ自分より強い子がいるんじゃないかと思っていました。

そんな中、小学3年生の夏休みに、父が東京で開催される子どものための将棋大会に連れていってくれました。その大会で優勝できたことが、プロ棋士を目指す一つの大きなきっかけになりました。

——それで奨励会に入られたわけですか。小学3年生の時の作文で「将棋の名人になりたい」と書いていましたからね。とは言っても、当時は「好きなことをしたい」という無邪気な気持ちしかなかったんですけれども。

——奨励会に入って順調に昇級・昇段し、中学2年生の時には加藤一二三九段に次ぐ

史上2人目の中学生プロ棋士となられていますが、デビューして何が変わりましたか。好きな将棋を指しているという点では、奨励会の時と変わらないんですが、プロ棋士になると、対局料や賞金を頂けるわけですね。そういったところで、責任感やプロ意識が芽生えてきました。

——学業とは、どう両立されていましたか。学校のことはできるだけ学校の中で完結させるように、心がけていました。宿題はやるしかないですけど、予習復習はしなくてすむよう、授業は集中して聞いていましたね。集中して話を聞く、考える力は将棋で養われたのかなと思います。

——予習復習なしでも、学年トップの成績だったそうですね。

中学校の間は大丈夫だったのですが、高校に入ってからは、東京での対局も増えて欠席することが多くなり、少しずつついていけなくなる科目が増えていきました。でも、それは仕方ないことだと思っていました。高校進学も断念しようと考えていたくらいですし、高校に入ってから将棋がメインだと決めていましたから。

——中学生の時、年間どのくらい対局されていたのですか。

プロ棋士となる四段に昇段したのが中学2年生の12月ですから、実質的には中学3年生の1年間だけで35局くらいです。

——対局以外に、プロ棋士としてどのような仕事があったのですか。

父が連れていってくれた
東京の将棋大会で優勝できたことが、
プロ棋士を目指す一つの大きな
きっかけになりました。

イベントに出演したり、アマチュアの方に将棋を教えたりする仕事がありますが、中学生の間は数えるほどしかしていません。高校生になり将棋がメインの生活になつてからは、対局数も、その他の仕事も増えていきました。

——その後、21歳の時には当時の名人戦のタイトル保持者だった加藤一二三九段に勝利し、最年少で「名人」となられていますが、その時はどのような気持ちでしたか。

現在、タイトル戦は8つ（竜王、名人、叡王、王位、王座、棋王、王将、棋聖）ありますが、当時は6つだったんですね。

その中でも名人戦は特殊で、まずは順位戦の5つのクラスを1年に1つずつ勝ち上がっていかねければなりません。他のタイトル戦は勝ち続けると1年でタイトル保持者への挑戦権を得られる可能性がありますが、名人戦だけは最上位のA級クラスに上がらないと勝ち続けても挑戦権が得られません。

歴代の名人たちは他のタイトルを獲つて、最後にようやく名人戦を制していたので、「名人Ⅱ第一人者」というイメージがありました。それに対し、私は21歳で初めて獲ったタイトルが名人だったので、まだ「名人」の名にふさわしい実力を身につけていないと感じていました。自分は名人戦につながる順位戦との相性がよかつただけではないかと。当時、世論は新しい棋士を待望していましたし、その風に乗れただけじゃないかとも感じていました。



最善を尽くして準備する。でも、対局が始まったら、準備していたことを全部忘れる。それが理想です。

——中原誠十六世名人など大御所の棋士がいらつしやる中で、世論は新しい棋士の登場を待っていたのですか。

当時の将棋界は30代、40代のベテラン棋士が中心でした。10年もの間、中原先生が名人の座につかっていたのですが、加藤一二三先生が名人戦で勝利し、その座を奪いました。そこで将棋界が動いたわけです。そのような戦国時代とも言える時期だった

から、私が名人を獲れたのかもしれませんが。——名人の座につき、追う側から追われる側になったことで、相当なプレッシャーを感じられたんじゃないでしょうか。

名人にふさわしい成績を残さなければという思いがありました。ただそうは言っても、自分の将棋を指すしかないわけで、少しずつ強くなつていくということに尽きるのです。

タイトルを獲れば、当然環境は変わりま
す。他の棋士の見る目も変わってきまし
成績が落ちることもあるんですけども、
それらを乗り越えてさらにレベルアップし
ていかなければなりません。

——対局が組まれると、それに向けて研究
されるのですか。

今では将棋界も情報化が進み、対局前の
準備は大事ですが、以前は対局が始まる
前から勝負でした。というのも、以前は、
棋譜（対局中の駒の動きを記録したもの）
を手に入れることが簡単ではなかったの
です。昭和50年代半ばくらいから、公式戦の
棋譜を紙で入手できるようになって、私も
対戦相手の棋譜を並べて研究するよう
になりました。

現在、公式戦の棋譜はすべてデータベ
スに入っていますから、対戦相手の棋譜も
すべてそろえられます。対局の2週間前
くらいに通知を受け取って、そこから準備を
進めていくことになります。

——棋譜から分析されたりするんですか。
対戦相手の成績や調子の良し悪し、どの
ような戦法を多く用いているかがわかりま

すので、それらを踏まえて一応シミュレ
ーションします。しかし、それがすべてだ
と
思ってしまうと、対局の場で新しい発想が
出てこなくなってしまう。

最善を尽くして準備する。でも、対局が
始まったら、準備していたことを全部忘れる。
それが理想ですね。

——何だかもったいない気がしますね。

事前の準備というのは、実戦のほんの
1%にも満たないんです。その1%に執着
してしまうと、大事なことを見失ってしま
います。だからと言って、準備をしておか
なければ、負けた時に悔いが残ります。

きちんと準備して対局に臨むことは、
技術的な面もありますが、精神的な面
で「自分はこれだけやったんだから、ベスト
を尽くせるはずだ」という気持ちになれる。
そのためにするのだと思いますね。

——では、残りの99%は？

将棋の指し手には、10の220乗の可能
性があると言われていて、1局の勝
負は110手くらいで決着がつくのです
が、その中でほとんど枝葉が広がっていく
ので、10の220乗の可能性が出てくると。

才能とは、将棋なら将棋の研究を

毎日自然に積み重ねていけることだ と 思っています。

将棋とはそういうものですから、事前の
研究や前例どおりに指し手が進むことは
あったとしても、必ずどこかで新しい局面
になるんですよ。それが序盤の早い段階か、
それとも終盤になってからかは、将棋の内
容によって違いますけれども、新しい局面
を迎えた時、自分の力で考えて、最適な指
し手を導き出す力が、その人の本当の強さ
になってくるのだと思います。

——谷川九段は、誰も思いつかないような
一手で、周囲を驚かせたそうですが、対局
中に新しい一手を思いつけるかどうかは、
才能によるのでしょうか。

私は、才能とは、一つのこと、将棋なら
将棋の研究を毎日自然に積み重ねていける
ことだと思っています。

——日々の生活の中で、いつの間にか考えて
しまっているような感じですか。

生活の中に自然に組み込まれている、と
言ったらいいのでしょうか。例えば、対局
で逆転負けをして、すごく悔しい思いをす
ることもあるんですよ。対局が終わった時
に「もう将棋を見るのも嫌だ」と思うくら
い。それでも、翌日の朝にはもう将棋盤に
向かっているんですね。それが自然にでき
ることが、才能ではないかと思えます。

——谷川九段のような棋士でも、「将棋を
見るのも嫌だ」と思われることがあるん
ですね。

将棋というのは残酷なゲームです。対局
時間は長いですし、10時間かけて積み上げ

毎日研究を 積み重ねながらも、 毎日新しい気持ちで 将棋に向かい合う。

たものが、最後の5分でミスして、ひっくり返されて負けることもあります。そんな風に自分がやってきたことがすべてムダになってしまった時は、相当落ち込んだりもするんですけど、一日寝たら、また将棋に向かえるかどうかです。

——日々の生活の中でも、常に将棋のことを考えられているのですか。

そうですね。とは言っても、それがルーティンワークになってしまっただけじゃありません。惰性で駒を動かしていても、強くはなれませんから。毎日研究を積み重ねながらも、毎日新しい気持ちで将棋に向かい合う。矛盾する2つの事柄をどう整理していくか、そこが難しいところです。

——それができるか、できないかは強さに関わってくるのでしょうか。

「長く活躍できるか」に関わってくると思います。将棋の世界は若いほうが強いんですよ。10代後半から20代は伸び盛りですし、勝率も高いです。ただ、そこから長く活躍できるかどうかは、精神的な部分が大きく関わってくるんじゃないでしょうか。タイトルを獲った後、今までと同じような気持ちで、のびのびと戦えるかどうか。20代後半から30代になって年下の棋士が出てきた時に、同じような気持ちで戦えるかどうかですね。

——守りの姿勢に入ってしまうのですか。

迷いが生じるんです。経験にはプラスの経験だけではなく、マイナスの経験もあって、それが邪魔をすることもあります。余計なことを考えてしまったりして。

——負けた対局を思い出して、ネガティブな方向に気持ちが引つ張られるとか？

対局中には、大きな決断をせまられる局面が出てきます。実力の差が大きければあまり出てきませんが、実力が五分五分の相手と対戦すれば、最初は互角で進んでいても、どこかで先を読み切れない部分が出てきます。それでも決断して、前へ進まなければならぬ局面が何度かあるんですね。その決断の時に、迷いが生じてくるんです。——というところは、年代によって、対局での取り組み方に変化が出てくるのですか。

直線的に指し手を読んだり、一カ所を集めて読むことは10代、20代のほうが得意です。狭いかもしれないけれども、

深く読むことはできる。それに対して、年齢が上がっていくと、広く浅く読むような感じにはなっていくと思います。

——スポーツ選手は筋肉量の減少など加齢による身体的変化の影響を受けますが、棋士の場合、記憶力などで加齢による影響を受けるのでしょうか。

10代の頃は自分が対局した公式戦の棋譜は全部覚えていましたが、年齢が上がってくると、対局数が増えることもあって、そうはいかなくなりました。

——棋士の記憶力って、すごいんですね！

一番良くないのは、中途半端に覚えていることです。過去の棋譜をうる覚えしていると、それに頼ろうとしますから、最も危険です。それだったら、最初から全部忘れてしまっているほうがいい。忘れていれば、自分の力で考えるしかありませんから。

——深く集中していける点と記憶力以外に、若いほうが有利な点がありますか。

瞬発力ですね。

——将棋における瞬発力とは何でしょう。

局面をパッと見て、急所をとらえる能力です。若い人は経験がない分、その局面を見て判断します。年齢が上がっていくと経験を踏まえて判断するので、局面を見た時のとらえ方は若い棋士とベテランの棋士では少し違ってくるんです。経験が加わっている部分が、プラスに働くかマイナスに働くかは、なかなか難しいところですが。

——勝敗を分けるものは何だと思われませんか。



平成25年に行われた第21回達人戦の決勝

写真提供：日本将棋連盟

対局中は、読み切れる部分を100%に近づけようと思っていますが、なかなかそうはいきません。95%くらいは読めても、持ち時間もありませんし、読み切れる前に決断せざるを得ないことがあります。残り時間30秒や1分となった時に下した決断がどちらに転ぶかは、運任せと言えらるでしょう。

ただ、最後の最後を運に任せることはあっても、常にベストを尽くす姿勢は大事です。目安として私は持ち時間の9割は使うようにしていますが、100%まで読み切ろうとする。その積み重ねによって、長く活躍できるかどうかが変わってくるんじゃないかと感じています。

持ち時間5時間の対局で、1時間しか使わずに勝つことが、いいことではありません

最後の最後を運に任せることはあっても、常にベストを尽くす姿勢は大事です。

ん。その対局は1時間しか使わずにラクに勝てたかもしれないけれども、それだと、その次につながっていかないので。

——次につながる。

そうですね。対局中はいろんな指し手を考えますが、それは次につながっていきません。というのも、終盤に考えた指し手が同じ局面に出てくることは滅多にありませんが、序盤、中盤で考えた指し手というのは、同じ局面で出てくることもあるからです。

持ち時間いっぱい使って3つの指し手を

考えついたとして、指すのは1つですが、

指さなかった残り2つの指し手もムダにはなりません。考えた過程が自分の中に財産として残り、別の対局で役に立つことがあるからです。将棋の戦法をどれほど一人で研究していても、やはり実際の真剣勝負の対局に勝るものは、ないですよ。

——真剣勝負の場で、全力を尽くすことが次につながる。

そうですね。1つ1つは小さなことでも、その積み重ねが長い棋士生活の中で大きな違いになるのだからと感じています。

——これまでに、現役引退を考えられたことはありますか。

若い頃は「タイトルが獲れなくなったら引退しよう」と思ったこともありましたが、実際に年齢が上がっていくとそんな考えはなくなりました。私にとって将棋は自分自身を表現できる最高のものですし、それは対局によってしか表現できませんからね。

若い棋士も次々に誕生していますし、彼らと対局したいという気持ちもあります。藤井聡太七段は私の40歳年下ですが、私が20代の頃、39歳年上の大山康晴十五世名人と大きな舞台で対局できたことは、貴重な経験となりました。



谷川浩司九段の著書。将棋を切り口に、多くの示唆に富んだ内容となっている。
『常識外の一手』（谷川浩司著、新潮新書）
『中学生棋士』（谷川浩司著、KADOKAWA）

棋士が対局で考えていることは、棋譜を並べただけではわかりません。「棋は対話なり」という言葉がありますが、実際に将棋盤を挟んでみて、ようやくわかることも多いですし、やりたいことはいろいろあります。

——これからやりたいこととは何ですか。

棋士の実績は「棋譜」という形でしか残せないわけですから、後世の方にも関心を持ってもらえるような棋譜を残したいですし、私と対局することで、今の若い棋士にとって何かヒントになればと思っています。若い棋士にとって、ベテラン棋士との対局はかなりギャップがあるものです。

——ベテラン棋士としての指し手を見せていきたいと。

というよりも、将棋は無限の可能性を秘めていますから、1つの戦法しか指せないのではもったいないんです。新しい指し手が出てきたら取り入れてみたいですし、私の指し手を見て、若い棋士に「こんな考え方もあるのか」と思ってもらえれば、私が現役を長く続けている意味があるんじゃないかなと思います。

——無限の可能性があるところも、将棋の魅力の一つでしょうか。

将棋が強くなるということは、「わからない」ということが、わかるということだと思えます。10代の頃、私は将棋がわかったような気になっていましたが、強くなるに少しづつ見えてきました。

AI（人工知能）の登場により、将棋の戦法もかなり変化してきています。以前なら損だと言われていた指し手を、AIでは評価して指してくるんですね。それでも一度洗い直してみたら、実はなかなかユニークな指し手だということが、結構あります。このようなことは40代、50代の棋士にとって、それまでの将棋観が揺らぐくらいインパクトのあることです。しかし、AIがプロ棋士をしのぐほどの力をつけているということは、将棋の新しい可能性を示してくれているとも言えますから、その変化を受け入れていきたいと思っています。

——確かに、AIとプロ棋士との対局によって、将棋の見方は広がりましたね。それに加えて、昨今の大変な将棋ブームで、スポーツ観戦のように将棋の対局を観るのが好きな「観る将」の方も増えているようですが、どのように感じられていますか。
テレビやインターネット動画など将棋の中継はだいぶ増えてきていますが、実際に観ていただくのが一番わかりやすいと思います。入口は何でもいいので、興味をもっといただけると嬉しいです。

——観る方が増えると、指すほうとしても何か変わりますか。

自分の年代でどんなことができるかというのは、ずっと考えていますね。

私は家庭や会社、学校の中で、野球やサッカーと同じように将棋が話題に上るようになってほしいと思っていましたので、藤井聡太七段の影響もあり将棋がメジャーになってきたのは、ありがたいと思っています。

特に去年、今年と将棋を始める小さいお子さんが随分増えて、子ども大会はどこも前年比3割、4割増しになったと聞いています。将棋を通じて、礼儀作法を身につけ、考える力や集中力などいろんな力を養ってほしいと願われているお父さんお母さんが、習い事の一つとして子どもたちに将棋を勧めてくださるようになったのは、すごく大きな変化だと思います。

——谷川九段が将棋を始めた当時には想像もできなかったことですね。将棋界に新風を巻き起こした谷川九段のように、今後どんなすごい棋士が現れてくるか楽しみです。本日は、ありがとうございました。

（インタビュー／ライター 更田沙良）

将棋が強くなるということは、
「わからない」ということが、
わかるということだと思えます。